感謝、感謝、そしてさらなる感謝
イーシャ・サーデサイによる紹介

米国では、感謝祭は国が存在するようになってからずっと――いえ実際には、そのもっと昔から――祝われてきました。それは1600年代に祝われ始め、1863年に正式に毎年祝う国民の祝日に制定されました。人々が集い、人生の豊かさに感謝の気持ちを表す時になりました。

バーバ・ムクターナンダとグルマーイ・チッドヴィラーサーナンダは、米国全土を広く旅し、毎日のように、とりわけ感謝祭などの祝祭日に、サッツァングを開催してきました。このため、シッダ・ヨーガの道では、この国の伝統を尊重するようになりました。グルマーイがよく言っているように、この祝日がどのような伝統に由来するかにかかわらず、それは誰もが神について考え、神の愛を体験し、感謝をささげる絶好の機会です。

シッダ・ヨーガの道では、感謝する理由を探す必要はありません。グルの恩恵によってシャクティが内側で目覚めると、私たちは心の中の、感謝の気持ちが常にあふれている部分に触れることができます。すると、感謝の理由は私たちの周り中に、豊かに多様にあることが分かります。地平線から昇る太陽の暖かさに、小川のせせらぎの音に感謝します。知人の優しいまなざしや、伝えてくれた励ましの言葉に感謝します。私の理解では、感謝の気持ちを体験する際に、私たちはこの明白な存在を貫く真理や魔法の何かを認識しているのです。この世界が生来持つ神性を垣間見ているのです。

感謝祭を祝って、私たちはこの地球の美しさと神聖さを表した映像を見て、楽しみ、それらに自分自身が包み込まれるという恩恵を得ます。それらは地球の豊かさを祝うものであり、崇拝のバーヴを伝えるものです。そして、それらを通して私たちはダルシャンを受け取ります。間もなく、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトで、この祝日

をたたえるビデオを見ることができます――そして、それは感謝の体験を美しく呼び起こすことが分かると思います。ビデオには、バーバ・ムクターナンダが 1975 年にオクラホマ州のカイオワ族を訪問した際の、シャクティ・プンジャのアーカイブからの貴重な映像が含まれます。

さらに今年―― 2023 年――の感謝祭は、インドのプラボーディニー・カールッティク・エーカーダシーの祝日と同じく、 11 月 23 日に行われます。そこで、ビデオにはその祝日を想起する映像も含まれます。

プラボーディニー・カールッティク・エーカーダシーは、長年私を魅了してきた祝日です。それはヴィシュヌ神にささげられた日で、ヴィシュヌ神が４カ月の休息から目覚めたとされる日を記念しています。私は神が休息していると想像するのが好きで、特にインドのモンスーンに当たる季節には、自然にそのように内に入り、再生する感覚があります。同様に、雨がやむ時、太陽が再び顔を出す時、サトウキビなどの作物の収穫が始まる時に、神が目を覚ますのを思い描くのが好きです。

私の家族はインドのマハーラーシュトラ州出身で、エーカーダシー、神が眠りに就き、その後目覚めるとされる日に行われる儀式について聞いて育ちました。具体的には、毎年人々がエーカーダシーに至るまでの数日から数週間の間に、マハーラーシュトラ州の町、パンダルプールに巡礼することについて聞きました。これらの中で最も大規模な巡礼は、夏のアーシャーダの月（6 月や 7 月に相当）に行われ、神が休息を始める日に最高潮に達します。カールッティクの月（10 月や 11 月に相当）に行われる巡礼は、神が目覚めることを祝います。アーシャーダの巡礼よりも小規模ですが、それでも毎年何千人もの巡礼者を引き寄せます。

私の祖父は、35 年間、ほぼ毎年パンダルプールへの巡礼をしていました。幼い頃、私は祖父や他のヴァールカリー、すなわち巡礼者が、神を賛美するアバンガをずっと歌

いながら、徒歩で 200 マイル以上も旅したという話を聞くのが大好きでした。中には、はだしで旅した人もいたのです！　ヴァールカリーの象徴である鮮やかなオレンジ色の旗を掲げた人がいつもいました。また、ハンドシンバルやエークターラ(1 弦のリュート)など、歩きながら簡単に持ち運べる楽器を演奏する人もいました。私の祖父は、タンブーラの小型版であるタンブーリを好みました。

ヴァールカリーがエーカーダシーのためにパンダルプールに到着すると、まず神聖なチャンドラバーガー川で儀式的な沐浴（もくよく）をします。その後、パンダルプールの寺院に祭られているヴィシュヌ神の姿であるヴィトーバー神(ヴィッタール神)に敬意を表し、崇拝をささげます。

多くの長年のシッダ・ヨーギから、グルマーイとバーバがグルデーヴ・シッダ・ピートゥにいた時は、ヴァールカリーがパンダルプールへ向かう途上や帰りに、努めてアーシュラムを訪れるようにしていたという話も聞きました。彼らはグルマーイやバーバのダルシャンのために来て、プラサードを受け取り、バガヴァーン・ニッティヤーナンダのテンプルを訪れたものです。アーシュラムの誰もが、喜びに満ちた行列の音で、ヴァールカリーがいつ来るかを知ることができました。

グルマーイとバーバ自身も、インドでの教えの旅でパンダルプールを訪れました。グルマーイが 1988 年にマハーラーシュトラ州の聖地への 8 日間の巡礼の一環として訪れた際に、ヴィトーバー神にアビシェークを行い、上質な絹の衣を着せ、アーラティーをささげていたのを、シャクティ・プンジャのアーカイブで発見しました。このビデオには、グルマーイとバーバの訪問の映像と、パンダルプールのヴァールカリーとヴィトーバー神のムールティの映像が含まれています。

私がヴァールカリーについて聞いて育った話や、シッダ・ヨーガの道でこの伝統に敬意を表してきた話は、私の心にとって非常に大切です――ですから、私がこのビデオ

にどれほど興奮しているか想像できるでしょう。それはまた、この巡礼を自分なりにかなえることができた時のこと、それもグルの家で行った巡礼のことも思い出させてくれます。2000 年の夏、私が 8 歳の時、「ゴールデンテール（黄金の物語）――聖人たちの生涯」に参加しました。それは、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムの子どもたちが演じたインドの詩聖たちについての一連の劇です。私は詩聖ナームデーヴを題材にした作品に出演し――何と、ヴァールカリーを演じるという――特別な栄誉に浴しました！ それはまさに自分の出発点に戻ったと感じた瞬間でした。伝統的な巡礼者の白い服を着て、私は他の小さなヴァールカリーたちと一緒に列を成してサッツァングのホールを練り歩き、グルマーイの前で踊りました。

あの行列の感覚、グルマーイのためにチャンティングして踊るのがどんな感じだったかを今でも覚えています。そう、私は芝居の中にいましたが、芝居が鼓舞する献身、純粋な喜び――そのすべてがとても生き生きとして本物でした。このビデオを見ることで、私たちは皆、同じような体験をすることができると信じています。私たちは皆、シッダ・ヨーガのグルたちと一緒に巡礼に行くことができます。

これからご覧になるもう一つの映像について、素敵な話を紹介したいと思います。数日前、グルマーイは、このビデオのために白いほら貝の映像を選びました。ヴィシュヌ神はしばしば、ほら貝を吹いたり、手に持ったりしている姿で描かれます。グルマーイがこの映像を選んだ後しばらくして、彼女はテンプルのそばを歩き、空を見上げました。グルマーイは、特にテンプルの上の空を見ていると、自分が話したり、教えたりしていることが何であれ、その形をした雲が見えると話しています。驚いたことに、この日、まさしくヴィシュヌ神のほら貝と同じ形をした、大きくて真っ白い雲がそこにありました！

そのような共時性と驚きの瞬間が映像に織り込まれています。見ているうちに、自分が行っているのは外側の場所への巡礼だけではないことが分かると思います。内なる巡礼が起こっています。感謝の気持ちが宿る、あなたの存在のその部分への巡礼です。

最近、感謝祭について語った時、グルマーイは言いました。「皆の心の奥底には、たくさんの感謝の気持ちがあります。人はいつも感謝の気持ちを表現できるわけではないので――伝統や文化に関係なく、神を信じているかどうかに関係なく――これはすべての人にとって、率直に感謝の気持ちを表す絶好の機会なのです」

© 2023 SYDA Foundation®.著作権所有。